
帰らず山の鬼女

松田麗子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帰らず山の鬼女

【Nコード】

N8100R

【作者名】

松田麗子

【あらすじ】

ある落ち武者が、見知らぬ山に迷い込み、難儀していたところを山里の娘にみつき、山里の主「内裏様」のもとに招かれる。天女のように美しい内裏様は、都からの客人を歓迎する宴を催す。その夜、琴の音に誘われ内裏様の寝所に入った男は、彼女の正体を見抜き…

東へ、東へ。小さな白い鳥が、飛んでくる。手を差し伸べると、鳥が腕に舞い降り、ほどけ、開き、沈香を漂わせる文ふみになった。

帰らず山の鬼女様へ……

文をさつと一読し、紅い唇で弧を描き、白魚の指先で、琴をかき鳴らした。

いつの世のことか、定かではないが、貴族の世の隆盛に翳りが見え、源平の戦に世が荒れ始める前のこと。

ある侍の男が、傷付き、破れ、ところどころ血の付いた、落ち武者の姿で山をさまよっていた。当時は夏の初めで、都では祇園祭りの頃。男は里に下りることもできずに、こうして幾日も幾日も、山をさまよっていた。

日も暮れかかける頃、男が寝る場所を探して歩き回っていると、どこからともなく、山の霧から浮き出るように、小袖姿の女が現れた。

「旅の方ですか」

男はどこからともなく現れた、上等な衣の、美しい女をいぶかしく思い、名をたずねた。

「お方と申します。見れば、遠方からこられて難儀しておられる御様子。近くに山里があるのをご存知でしょうか。私はその内の裏様に仕える者でございます。どうぞ、里にいらしてくださいませ。内裏様も歓迎してくださいませ」

「それはありがたい」

お方と名乗るこの女が、このような都から離れたところにいるのが不思議なほど上品で、もののけとも山賊とも見えず、長く山をさ

まよい疲れきっていた男は素直に里に招かれた。

少し歩くと見えた山里は、田畑も青々と茂り、子供や老人が多かったが、皆飢えも戦も知らないような、盗みなどもしそうにないような、幸福そうな顔をしていて、多くの人がそのように暮らしているようで、東国の山深くにこのような里があることに、都育ちの男は目を見張った。

里の奥深くには、都の貴族の屋敷そのままの邸宅がそびえたち、庭には広い池に橋までもかかり、一切の雑草もなく手入れがされていた。行き交う屋敷に使える者達も、皆上等の衣を着て、それぞれ香を漂わせ、皆にこにこと穏やかそうで、男はまるで都に帰ってきたように感じた。

白い石の映える庭に控え、御簾越しに内裏様とやらと面会する。お万が「内裏様でございます」とひとこえかけると、蘭麝らんじやの香りがふわり薫った。

簾の子に控える女房が、「名を聞かせなさい」と言つのに答え、男は身の上を語りだした。

「都から相模の国へ、相模守の姫君をお連れする旅の護衛をしておりました、しがたない武家のものでございます。道中山賊に襲われ、気付けばひとり山をさまよっております。姫君を山賊からお守りできたのか、それも定かでなく、相模に向かうことも都に戻ることもできず、見苦しくも山をさまよっております」

ふと、蘭麝の瑞々しい香りに、男が顔を上げる。いつの間にか、目の前に、天女のように美しい、妙齡の女性が立っていた。

口も利けなくなった男に女性が言う。

「このように直接お顔を見て話すのは、大変礼儀破りなことではございますが、ここは都でなく、信濃の山里でございます。堅苦しいことはなしに致しましょう。わたくしもわけがあつて、都から落ちぶれた身でございます。都からいらした方と聞いて、いてもたつていられなくなつてしまいました」

からすの濡れ羽色の長い髪は、さやさやと夕暮れの風にゆれ、翡翠のような青い袿には、白く精緻な卯の花が咲き乱れる。切れ長でありながらあたたかな眼差しに、柔和な微笑を湛えた紅い唇は、なよ竹のかぐや姫のそれであつた。

初めて貴人の女性を目の当たりにした男は、すっかり目を奪われて、顔を伏せることもできず、ただただ息もできずに内裏様を見つめた。

「どうぞ、都の話をお聞かせくださいませ。今宵は宴を催します」
気付けば篝火が焚かれ、雪のように白い内裏様の顔に、妖しく赤みを添えていた。

夜になり、闇を払うように火が焚かれ、宴がはじまった。男は身分に不釣合いなほどの、仕立てのよい狩衣を与えられ、身なりを整え、湯殿まで使うことを許された。里の娘が舞を披露し、酒、焼いた川魚、鳥の羹、さらには揚げ菓子までもがふるまわれ、男は久しぶりの食事の豪華さに舌鼓を打った。

どこからか、女房が琴を運んできて、内裏様がそれを爪弾くと、そこにいたものの全てが、おのずと黙り込むような、冴え冴えとした音が広がり、夜闇までもが耳を傾けるように思われた。あまりの音に、うかつな褒め言葉さえ口にできず、黙るばかりの男に、内裏

様はただ微笑みかけた。

「どうぞ、都の話をお聞かせくださいませ」

男はねだられるままに都の他愛無い話をする、そのひとつひとつに、内裏様は耳を傾け、いかにも楽しそうに笑うのだった。

話は男の家族に及び、男は懐からの小刀を出して見せ、故郷を懐かしんで語り始めた。

「これは妻の安産を祈願して、ある寺に通っていた時に、お坊様に頂いたものです。この小刀が魔を払い、安産を助けると。お陰で妻は息子をふたり、娘を一人、安産いたしました。遠く相模まで行くと決まった時に、魔を払う力があるならば、道中を御仏の力がお守りくださるだろうと妻が言って、私に渡してくれました」

「それは素敵ですね。ところで、どれほどの間、都を離れていらっしやるのですか」

「三箇月になります。結婚してからも、このような身の上であつて留守がちで、妻には迷惑をかけておりました。その上、この体たらくです。都に帰ることができでしょうか」

内裏様はまた琴をかき鳴らした。

「そうですね。どうぞ、御気のすむまでここにいらしてください。山奥といえど、今は夏で、食べるものに困りませんし、外の世界の話をしてくれる人にこそ、わたくしたちは飢えております」

男は久し振りに酒を口にしたためか、いままでの疲れか、人里についての安心感が、早々に足がもつれ、早々と退席することになった。客間らしき西対に、お万につれられ畳に寝かされると、男はすぐに眠り込んでしまった。

ふと目を覚ますと、辺りは月明かりに照らされ、青に銀に庭の砂利も池も輝き、この世と思われぬほどの美しさであった。ついふらふらと庭に出ると、蓮や夕顔が咲き乱れ、蛩がちらちらと踊っている。そこにかすかな琴の音が、遠くから響いてきて、ふらふらと男が音のほうに歩いていくと、気付けば内裏様の部屋まで来ていた。男がそつと几帳の隙間から覗き込むと、手のむくままに琴をかき鳴らす内裏様の眦に、うつすらと涙が溜まっているのが見えた。内裏様は几帳の隙間から差し込む月光が塞がれているのに気付き、「どなたかいらっしゃるのですか」と男に声をかけた。

男が素直に「ここにおります」と言うと、「素直なお方ですね。こちらにいらしてください」と、几帳の内側に引き込まれ、気付けば内裏様を抱きすくめていた。

「申し訳ありません」
「いえ、いいのです。わたくしの夫は都にいて、もう何年も会っていないのです。どうかこの一晩だけ、わたくしの寂しさを癒してください」

男は内裏様の単に手をかけ、自分の着物も脱ごうとしたところでふと妻から預った小刀が、かたかたと振えているのに気が付いた。不審に思い、小刀を出し、抜くと、青く輝いている。しかもその刀に映りこむ内裏様の顔は、見るも恐ろしい鬼であった。あわてて小刀を内裏様に向けた。

「ものけめ！」

内裏様は答えず、ただ鈴を転がすようにころころと笑う。男の目に映る立派な屋敷も、瞬間に消えうせ、荒れ果てた山寺の跡に代わった。その中で内裏様はやはり美しく、たおやかな指で、鏡台から螺鈿の鏡を取り、男に見せた。

「そら、御覧下さいませ」

男が鏡を見ると、そこはどこともつかぬ、急流の河原で、カラスがあつまり屍を食らう、凄惨な光景であった。みると、屍は髪の長い、若い女であったようで、引きちぎれた着物が痛々しい様子で、山賊に慰みものにされた末に打ち捨てられたように見える。その顔に男は見覚えがあった。男が警護していた、相模守の娘であった。

「なぜ目を背けておいでですか。これは貴方が引き起こした事実ではありませんか。さあ、ごらん下さい。これで終わりではありませんん」

男が鏡を覗くと、そこには、暗い寝所で交わる男女の姿があった。見知らぬ男の下で喘ぐそれは、まぎれもなく男の愛しい妻であった。息を飲む男の目の前で、鏡が、今度は歳若い、精悍な少年の顔を映し出す。少年は小さな子供ふたりにむかい、爛々と怒りに燃える瞳で「いいか、おれたちの父は、主を守れず逃げ出した臆病者だ。母上を守ることもせず、主を守ることもできない臆病者を、父と思う必要はない。今日から、兄である俺に従うのだ。もし帰ることがあれば、俺が首をはねたほうが、この家のためと言つものだ」

たまりかねて、男は小刀を鏡にぶつけ、鏡を粉々に割った。

「嘘だ」

「嘘ではありませんよ」

「妻は私を待っているはずだ。仕事で留守がちではあったが、妻は私をいつも優しく迎えてくれた」

「ではなぜ、奥さまは貴方を優しく迎えられたか、考えたことはないのでですか。都の治安も乱れ始めて、心細いなか女手一つで、子ども守り育てていて、なぜ奥さまは不満も言わず貴方に優しくできたのです。愛、とでもお思いですか」

「そつだ」

「ご冗談を。貴方に帰るところなどないのですよ」

男は小刀で、御仏に祈りつつ切りかかった。すると闇からわき出るように、おびただしい数の鬼の集団が現れて、内裏様の周りを囲

った。男が小刀を向けると、小刀は青い光を発し、光にふれた鬼たちはぼろぼろと崩れていった。男は小刀で身を守りながら、必死に山を駆け下り、もうどうなっても一目家族に会いたいと、一路都を目指した。

京に戻ると、もとのように男の家があり、そこには妻がいた。帰ったぞ、と男が言うより早く、男の息子が切りかかってきた。男は腕を切られ、たまりかねて息子を怒鳴りつけようとしたが、それより早く、妻の腕に抱かれた乳飲み子が見えた。自分の子ではないと、妻の表情から男は確信し、矢も盾も止まらず、男は狂い、片腕だけで妻と乳飲み子、息子と、隠れていた子ども二人を切り殺し、異変を感じて駆け付けた妻の男に、背を射抜かれて男は絶命した。

そこで男は目を覚ました。

「どうなさったの。いやな夢を見ていたようね」

そこは都にある男の家で、妻が心細げに男の顔を覗き込んでいた。乳飲み子はおらず、子どもたちはすうすうと、安らかな寝息を立てている。そうだ、自分は無事に相模守の姫を送り届け、都に帰ってきたばかりであった。

「きつとあの小刀のせいよ。夜中になると、かたかたと震えて、気味が悪いもの。きつともものけ憑きの刀だね。明日にでも棄ててしましましょう」

男が見ると、なるほどたしかに、小刀が青く光り、かたかたと震えていた。男は小刀を引き寄せたが、抜かず、「ああ、棄てよう」と言っ、眠ってしまった。次の日には朝一番に川へ行くと、小刀を投げ捨て、それ以降川には近寄らなかつた。

男は武士として栄達を果たし、後に台頭する平氏の傘下となり、孫八人に恵まれ、幸福な余生を送った。

四

手慰みに事を弾いていると、白い鳥が、山肌に打ち捨てられた、落ち武者姿のからからに乾いた木乃伊に舞い降りて、開き、ほどけ、灰となって崩れ落ちた。木乃伊の手には、真っ赤に錆びついた小刀が握られていた。

帰らず山の鬼女様へ

わが夫を呪うため、字の書けぬ身の上なれば、代筆にて、あなた様へお手紙を差し上げます。

ある人から、信濃にある『帰らず山』の話をお聞きしました。その山には棄てられたものが、幸福な幻の中で、この世ともあの世ともつかぬ異界をさまよう里が、いつわりの桃源郷ともいうような、ただただ幸福な世界があると。そこに文を書き、燃やした灰が、鳥となつて貴女様に届き、呪いを聞き届けて下さるのだと。

夫は結婚以来、地方に赴く貴族の警護をし、そのために留守がちでございました。夫が帰つても、夫を待つ心細さ、さみしさから、怒鳴りつけ、言い合うばかりの日々。体を重ねることがあつても、心が交わることはあまりませんでした。そうするなかで、夫以外の男ふたりと、関係を持ち、子をなしました。だというのに、無邪気に喜ぶ夫を見て、怒るといふより、あきれてしまいました。

この人が生きていれば、いずれわたしの罪に気づくでしょう。どうか、幻想のままに、夫を殺して下さいませ。

真実を知るよりも、都に帰るよりも、夫にはそれが一番幸せです。このように夫を呪い、鬼女様に託すことが、わたしが夫にしてあげられる、愛でございます。

完

四（後書き）

勉強不足もあると思いますが、信州戸隠の紅葉伝説を下敷きに、coccoさんの名曲「強く儂い者たち」に着想を得て、書かせていただきました。読んでいただいた方々、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8100r/>

帰らず山の鬼女

2011年3月22日15時10分発行